



Jia Wei の研究室に所属する 3 人の「Wang」。彼女たちの名前は左から順に Xiao-yan、Xiao-rong、Xiao-xue（中国語表記は写真上方）だが、英文論文ではすべて「X. Wang」と表記される。

## Identity crisis

### 誰が誰だかわからない

Nature Vol.451 (766-767) / 14 February 2008

中国人著者の研究論文がますます増えてきているが、彼らはその研究功績を正しく認められ、正当な認知を得ているだろうか。英文表記の際に名前が混同されるという事態によって、そうはいかなくなる可能性がある、Jane Qiu が報告する。

LIHOU-KAI

上海交通大学薬学部の副学部長である Jia Wei は、代謝経路なら数百だって暗誦できるが、大学院生の研究論文となると混乱を起こす。というのも、彼の研究室に所属する Wang Xiao-yan、Wang Xiao-rong、Wang Xiao-xue（上の写真で Jia と一緒に写っている）という、それぞれ違う漢字 2 文字の名前

をもつ 3 人が、論文著者名の英文表記ではまったく同じ「X. Wang」に略されてしまうからだ。「どの学生がどの論文を書いたのかを区別するのに本当に苦労させられます」と Jia はため息をつく。

これと似た混乱は、同じ研究室に所属する John Roberts と Jane Roberts が共同研究に参加し、その論文で「J.

Roberts」と表記されたときにも起こりうる。しかし、中国人氏名の識別については、英文論文に記載する際の漢字の音訳の問題や、増加を続ける人口に対し、一般によくみられる苗字の種類がわずかしかない、などの問題が絡み合っている。中国公安部によれば、わずか 129 種類の苗字を全人口の約 85 パー

セントに当たる 11 億人以上の人々が名乗っていると推定されている。それに加えて、略称の使用、姓名の表記順序、さらには、表記のルールが論文誌によって異なることが、混乱に拍車をかけている。

英文論文誌に論文発表する中国人研究者は、ローマ字化システム（ピンイン）を使って、中国語での発音をアルファベット化して姓名を表記する。ところが、この方法は双方向に一意的ではない。例えば、中国人の苗字である「Wang」に当てはまる漢字は 2 種類考えられる。さらに、苗字だけでなくイニシャルも同じ中国人研究者の数が非常に多いことが、問題を複雑化させている。米国国立医学図書館が監修する生物医学文献データベース PubMed を使って、著者「Wang X」の論文を検索すると、8904 件がヒットし、この数はほぼ毎日のように増えている。

これは中国人に固有の問題ではない。「日本人や韓国人の英文論文でも同じ問題があります」。こう語るのは、フランス・ストラスブールに本部があり、国際的な生命科学研究を推進しているヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム（HFSP）の伊藤正男会長である。検索エンジンや出版物データベースを利用する研究者や編集者は、アジア人著者の識別むずかしいと感じている。「その結果、アジア人研究者は、共同研究プロジェクトへの参加や査読の依頼を受ける機会が少なくなっているのです」と伊藤は話す。

アジア人の姓名表記に関する出版社のルールがまちまちなのも問題を悪化させる原因の 1 つだ。例えば、複数の文節で構成されるアジア人の氏名の略称についての取扱いが、論文誌によって異なっている。もし、論文誌が、名前の漢字 1 文字ずつに略称を用いることにすれば、研究者の論文を見分けるうえで役に立つ、と Jia はいう（この方法であれば、略称は単に X ではなく、Xiao-rong は X. R. に、Xiao-xue は X. X. になる）。「研究者の業績を評価する場合やヘッド

ハンティングの際に、これが大きな問題となっているのです」と Jia は語る。

また、名前→苗字の順序を固守する論文誌がある一方で、各国の慣習による表記法で著者名を記載させる論文誌もある。例えば清華大学（北京）でナノカーボン技術の研究を行っていた 2 人の研究者、Yang Wei と Wei Yang のケースがあった（コラム「漢字にまつわる混乱」参照）。現在は浙江大学（杭州）に所属する Yang Wei によれば、清華大学には、彼と同姓同名の研究者が何人かいたばかりでなく、同じナノカーボンの研究者に同一イニシャルの Yang が複数いたというのだ。「目当ての研究者を見つけ出せるのはラッキーなことなのです」と Yang Wei は話す。

幅広く蔓延するこの問題を逆にとり、名前にまつわるあいまいさを利用した研究者もいる。外科医の Liu Hui は、苗字が同じでイニシャルも同じ他人の研究論文を使って履歴書の水増しを行ない、名門清華大学の学部長補佐にのし上がった。しかし、経歴詐称が後日発覚し、2006 年 3 月に同大学から解任された。

アジア人でさえ自国出身の研究者を見分けられないとなれば、欧米人にとってはさらにむずかしい話だと語るのは、米国物理学会の機関論文誌の編集長 Gene Sprouse である。「アジアの査読者の数が非常に少ない理由をウチの編集者に尋ねたところ、同じ苗字とイニシャルのアジア人研究者がとても多いために、適切な人材を正確に特定することがむずかしいという答えだった」と Sprouse は話す。そして、今後、アジア人研究者による論文が増えていけば、この問題は悪化の一途をたどるだろうという。

近年、中国、日本、韓国からの研究発表が急増し、2006 年には、トムソンサイエンティフィック社のサイエンス・サイテーション・インデックス（SCI）に掲載された科学文献の 5 分の 1 を占めるまでになった。これは、米国の約 3 分の 2 に匹敵する（L. Leydesdorff

and C. Wagner 著 *Scientometrics*、近刊）。中国大陸の著者による SCI 掲載論文数の伸びが特に大きく、1996 年に 2.3 パーセントだったものが、2006 年には 8.4 パーセントになっている。

### 解決への試み

こうした動向に対応するため、米国物理学会では、英語音訳した氏名の表記に加えて、中国語、日本語、韓国語による表記を併用できるオプションを論文著者に提供するという、独自の措置に踏み切った。「これは単なる出版上の問題ではない。個人の名前は大切なもので、この新措置は、我々がアジア人研究者を尊重しており、我々の論文誌への投稿を歓迎しているというメッセージだ」と Sprouse は話す。米国物理学会は、この措置の対象をアラビア語などほかの言語に拡張することも考えているという。

この動きを歓迎する人たちが多くいる一方で、同じ方法をとる出版社が急増するかについては疑問視する向きもある。数種類の外国語活字を使った印刷となると、印刷所はそのすべてのフォントとコードを組み込む必要があり、コスト増につながる。また、この措置自体がどれほど有益なのか、という声もある。「（この措置が）本当に役立つようになるのは、それらを出版物データベースにも取り込み、アジア人著者の検索を著者の母国語でもできるようにしてからのことだと思います」と伊藤は話す。

このような懸念は、PubMed のような文献データベースではまだ感じられていないようだ。米国国立医学図書館索引課長 James Marcetich は、アジア人著者の索引検索に伴う問題は把握していないという。多くの場合、ユーザーは、キーワードや著者の所属を打ち込むことで検索を絞り込むことができるからだ。しかし、数年ごとに所属が変わったり、複数の研究分野にまたがって研究に取り組んだりする研究者は多い。このため、絞り込みの過程には困難が伴い、時間がかかる場合がある。

「効率がすべてなのです。目当ての著者を15分で見つけ出せるのか、6時間かかるのか、という問題です」。科学技術出版企業エルゼビア社（オランダ）の北京事務所マネージャー、Sun Xiaopeng は語る。Sun は、著者の母国語を使って行なう検索の実用度については懐疑的である。研究者にとって、なじみのない言語で検索するのは極めてむずかしいことだからだ。エルゼビア社には著者識別機能「Scopus」などのツールがあり、それらを使えば、よくある苗字のアジア人著者、あるいは欧米人著者の特定に使える、と Sun は話す。

2006年から提供が開始された著者識別機能では、「Scopus」データベースがカバーする1万5000種の論文誌に論文を発表した約200万人の著者ひとりひとりに対して、固有の番号がつけられている。そして、氏名が同一か類似している著者について、アルゴリズムを使って、所属機関や論文発表歴、研究分野、共同著者などから識別を行なう。「Scopus」は、収録するデータの95パーセントについて、99パーセントの精度で識別ができたと宣伝されており、作成された著者ひとりひとりのウェブページに個人データの概略を表示し、著者自身が内容を修正できるようにしている。「これは、研究者がどこへ移動しても必ずついていく、いわゆる著者パスポートのようなものです」と Sun は話す。

このような商品を提供しているのはエルゼビア社だけではない。今年1月、トムソンサイエンティフィック社（米国フィラデルフィア）は、同社独自の「ResearcherID」を発表した。研究者はこれを使って個人IDを作成し、自身の論文の被引用度を管理できる。登録は1回限りで、研究者には、ソフトウェアによって番号が付与される。「『ResearcherID』は、発表論文にまつわるあいまいさを解消し、ネット上で模索される研究の協力関係にとって安全な空間を提供します」とトムソン社の製品開発担当副社長 Jim Pringle は話す。

現在、約3500人の招待ユーザーがこのサービスを利用している。

### 共同戦線

ジョンズ・ホプキンス大学応用物理学研究所（米国メリーランド州ローレル）の図書館司書 Susan Fingerman は、エルゼビア社が宣伝している著者識別の精度は「おそらく誇大表示」だと考えている。また、いずれにせよ、上述のいろいろな方法は解決法の一部でしかないとも話す。この著者識別問題の原因は、出版のかなり上流の部分、つまり、論文誌がアジア人の姓名表記に関して一貫したルールをもっていない点にあるからだ。出版各社が一体となって姓名表記についての統一的な方法を決めるべきだ、と彼女は主張する。「それができて初めて、著者識別システムが本当に便利なものになるのだと思います」。

しかし、現在市販されている製品では、すべてのデータベースで共通に使える識別子が提供されていない。この点については、エルゼビアやネイチャー・パブリッシング・グループなど2046の学術出版社の連合体である CrossRef に1つの解決法があるかもしれない。CrossRef は、電子コンテンツに使われている（論文識別用の）デジタルオブジェクト識別子（DOI）に似た「Contributor ID」の導入をめざしている。「CrossRef は、かねてから普遍的な著者版 DOI 登録制度の構想を検討していました」と CrossRef の戦略的イニシアチブ担当ディレクター Geoffrey Bilder は話す。アルゴリズムも、ユーザー自身が作成するシステムも記載の誤りが生じやすいのに対し、CrossRef では、記載内容の裏づけ・認証を行なうシステムを提供できるという。識別子を本格的に使えるものにするには、この認証システムが不可欠だと Bilder は話す。

今年の後半、CrossRef は、書籍や学術論文の著者などを対象に、その著作の登録をよびかけて、試作版の実用化試験を実施する予定にしている。著者

## 漢字にまつわる混乱

役に立たない略称の問題（25ページの画像参照）のほかに、中国人の姓名を英語で表記する際に生じる2種類の問題。

黎燕

Li Yan

李彦

Li Yan

### 音訳による混乱

この2人の研究者の場合には、中国名が異なっているにもかかわらず、英語に音訳すると、まったく同じ「Li Yan」になってしまう。

魏洋

Wei Yang

杨卫

Yang Wei

### 順番に関する混乱

姓名表記の順番についてのルールが論文誌によって異なっていると、2人の研究者、Yang WeiとWei Yangが混同されることがある。

別にリスト化された書籍や論文については、各出版社のウェブサイトとリンクすることで、記載内容の裏づけが行われる。

「普遍的な著者識別システムができれば、混乱した状況の解消に役立つかもしれませんが、と Wang Xiao-yan はいう。中国には、同じ Wang 姓を名乗る人が約9300万人もおり、略称が同じ「X. Wang」の研究者と共同研究を行なう、あるいは同じ研究分野の同僚となる可能性は高い。人違いの可能性によって欧米の研究者と対等な競争ができなくなることを彼女は心配する。「私のキャリアの障害になりかねませんから」と彼女は話している。 ■

Jane Qiu が北京から Nature に寄稿した。